Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

Februar 2023

45

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第45号

発行日　2023年３月1日
発　行　鳴門市
編　集　鳴門市ドイツ館
〒779-0225
鳴門市大麻町桧字東山田55-2
TEL：088-679-9110　FAX：088-689-0909
E-mail：doitukan@city.naruto.i-tokushima.jp

松江豊壽 生誕 150 周年記念企画展
敗者とともに松江がめざしたもの

令和４年は、板東俘虜収容所長松江豊壽の生誕 150 周年の記念の年でした。生誕日の６月６日を挟んで、令和４年４月 26 日から６月 26 日の日程で企画展を開催しました。いくつか残る履歴書から陸軍時代の経歴を知ることはできるものの、自身の行動や考えを記した日記や回想録などを残さなかったため、豊壽本人のさまざまな事案に対する胸のうちを知る手がかりがありません。そのような中、今回の企画展では、「家族の記憶」、「軍への報告」、「部下が伝える豊壽が管理した収容所の雰囲気」、「捕虜たちの豊壽に対する印象」、「豊壽と飯盛山白虎隊墓地の拡張」と、家族と部下や捕虜たちなど豊壽を取り巻く様ざまな立場の人物の記録を紹介することで豊壽の人物像を探ってみました。

豊壽の長女寿子さんは、「母もドイツ人から各種調理法を習った」ことを記憶していました。これは大戦休戦後の 1919 年の出来事と考えられますが、収容所員の夫が持ち帰るドイツ料理に強い関心を持ったのであろう松江夫人と所員の妻たちは、カルカッタのグランドホテルで勤務経験のある捕虜から西洋料理の手ほどきを受けており、その様子が写真に記録されています。このような機会は、ドイツ人を信頼し保持する技能の高さを認めていた豊壽の発想で生まれたのかもしれません。

これも 1919 年の出来事と考えられますが、捕虜の写真撮影技術が優秀であったことから、所員一同で一台 18 円のコダック社製カメラをアメリカから取り寄せ、撮影から現像・焼付けの技術指導を受け全て自分たちで行えるようになるまで熟達したと、所員の一人である亀谷友二郎軍曹は記憶していました。敵をも敬う豊壽の姿勢が管理者と捕虜という垣根を越え、所員の技術習得につながっていたことを物語る記憶です。

捕虜たちが帰国前に計画した亡くなった戦友たちを慰霊する記念碑建設について、豊壽は「この上なく乗り気で好意的な尽力によって」実現に向け軍司令部等と交渉します。その結果「ドイツ兵の慰霊碑」は完成し、完成式典に豊壽を招くことで感謝の気持ちを伝えています。豊壽は退役後、出身地福島県若松市（現会津若松市）の市長に就任しますが、在職末期頃から飯盛山の白虎隊墓地の整備に力を注ぐこととなります。相当の苦労の末、整備の最終段階に実現するイタリア首相ムッソリーニから寄贈された白虎隊記念碑の設置と除幕式典までやり遂げます。豊壽は、郷里の地で板東のドイツ兵捕虜と同じ仲間を想う心情で白虎隊墓地の整備を最後までやり遂げたのかもしれません。今日、ドイツ兵の慰霊碑が建つ板東俘虜収容所跡と飯盛山白虎隊墓地は、いずれも文化遺産として継承され、捕虜となり、あるいは自刃した人びとの辛い思いについて語り、そして学ぶ場となっています。21 世紀を迎えても、武力で一方的な主張を表現する行為は減少していません。豊壽は戦争で奪われた尊い人命を丁寧に供養するとともに、争いをなくすためには互いを理解し合うことが重要であることを、それぞれの場所で伝え残したかったのかも知れません。　（森）

ムッソリーニ寄贈白虎隊記念碑前の記念写真

企画展「ドイツ人捕虜が表現した徳島の情景
―第一次世界大戦における板東資料の独自性」

ユネスコ「世界の記憶」への申請に関連し、世界的な視点で「板東俘虜収容所」を捉えることを目的とした企画展を令和 4 年 10 月 7 日から 12 月 27 日にかけて行いました。世界に散在する第一次世界大戦の捕虜の資料の全てを短期間で調査することは困難であったため、主に先行研究を整理しながら、「板東俘虜収容所」とその資料の独自性について考察を進めました。そのなかで、当時のヨーロッパ各国の捕虜の待遇や情勢、日本国内の収容所やそこに残された資料、最後に板東の資料の独自性について紹介しました。また展示物として、第一次世界大戦直後にドイツで起こったハイパーインフレ時の紙幣（有森茂生氏寄贈）や、板東の捕虜であり建築家であったカーステン・ヘルマン・ズーアのスケッチ画（マリオン・ズーア＝モイリヒ氏寄贈）等を公開しました。（長谷川）

ドイツ館 板東俘虜収容所講座の開催

昨年に続き、「板東俘虜収容所」に関する最新の調査結果について、ドイツ館スタッフ 4 人が講師を務める「板東俘虜収容所講座」を開催しました（各概要は後記）。この講座では定員であった 50 名を超える応募をいただきました。第 1 回（10 月 8 日）「板東俘虜収容所と文字」（市国際交流員：ダリオ・シュトライヒ）では、収容所の印刷物の文字を主とし、第二次世界大戦以前に用いられた文字の変遷を取り上げました。第 2 回（10 月 22 日）「ドイツ人捕虜が表現した徳島の情景－第一次世界大戦における板東資料の独自性」（学芸員：長谷川 純子）では、当時のヨーロッパの捕虜収容所の状況と各国の情勢比較から、板東俘虜収容所とその資料の独自性について考察しました。第 3 回（11 月 5 日）「聖堂に描かれた壁画―幻の唐草文様」（館長：森 清治）では、ドイツ兵捕虜が制作した徳島市の聖パウロ三木カトリック徳島教会の壁画制作の背景について焦点を当てました。第 4 回（11 月 19 日）は、（前館長・ドイツ館史料アドバイザー：川上 三郎）「徳島俘虜収容所―徳島市内にあった捕虜収容所」では、板東に移転前にドイツ兵捕虜がいた徳島俘虜収容所での彼らの生活や活動について紹介しました。（長谷川）

1.「板東俘虜収容所と文字」

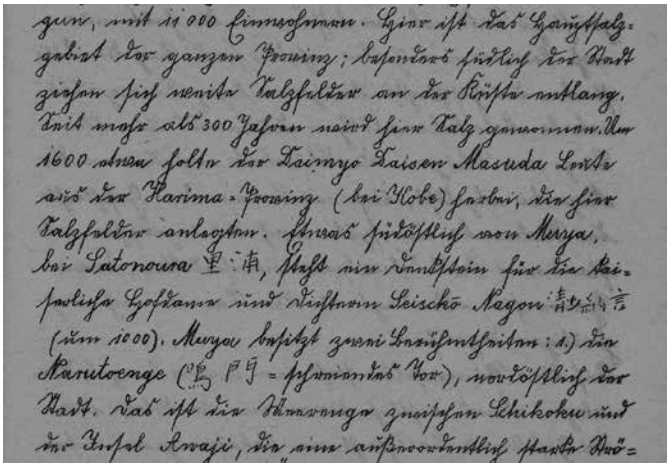
第二次世界大戦後に生まれたドイツ人が板東俘虜収容所の資料を目にする際、頭を抱えてしまう人が少なくないでしょう。書類によっては書かれた文字が読めない場合があるからです。捕虜として日本に護送されてきたドイツ人はほとんど、ドイツ帝国が建国された 1871 年以後に生まれ、帝国政府が定めた教育を受け、その時代に教わった文字に馴染んでいました。

現代ドイツ人が学校で教わる文字との大きな違いは文字自体にあります。ヨーロッパでは中世から様々な文字体制が生まれ、英国・フランスなどにおいてローマ字が印刷文字及び筆記体文字として主流となる 16 世紀末までは複数の文字体制が並行して存在しました。一方ドイツでは、中世に流行った建築様式であるゴシック様式の影響を受け、装飾にこだわった文字の書体が主流となり、長い間印刷文字として普及していました。ドイツ語で「フラクトゥール」文字と呼ばれているこの文字はドイツで進化しながら最も長く使用され、帝国時代ではローマ字と並び、多くの出版物に見られました。

しかし、西欧の国々と同じようにドイツもまたルネサンスという、文化などにおける古代文明の復活を受けて、いわゆるローマ字もまた出版物で使用されるようになりました。読み書きがより簡単なローマ字への完全なる切り替えがなかった主な原因は、一般ドイツ人が「フラクトゥール」文字に対して抱いたイメージにあります。当時は「ドイツ文字」とも呼ばれることがあって、国のアイデンティティーに不可欠な部分と考えていた人も少なくなく、ドイツ文化の一部として認識されていたこの「フラクトゥール」文字は捨てがたいものでした。

そんな歴史的背景を受け、帝国政府が定めた小学校の教育を通じて、日本の収容所に暮らしていた捕虜たちを含めて、ドイツ人は複数の印刷文字と筆記体を学校で習い、ニーズや習慣などに合わせて板東で印刷物を作る際に使い分けました。

今回の講座では板東俘虜収容所に長年過ごしてきたドイツ人捕虜が残した資料に見られる文字を通じて、ドイツ帝国の教育・出版物などの状態が窺うことができ、捕虜たちの当時の常識について理解を深めることができました。（シュトライヒ）



複数の書体を使った『ディ・バラッケ』の記事

2.「ドイツ人捕虜が表現した徳島の情景 ―第一次世界大戦における板東資料の独自性」

第２回目の講座は、企画展とともに板東資料の独自性をテーマに発表を行いました。内容は、第一次世界大戦時における世界的な視点でみた板東俘虜収容所と板東資料の独自性の調査についてでした。

ヨーロッパを中心とした第一次世界大戦時において、捕虜となった総数は約 700 万人とされています。その殆どが、ヨーロッパ各国に収容されましたが、その中でもドイツの捕虜となった兵士は最も多く約 240 万人いました。毒ガスなどの当時の最新兵器を用い、予想以上に長引いたこの大戦において、ドイツを中心にヨーロッパの戦況は厳しく、ドイツやオーストリア・ハンガリー、ロシアなど場所によっては食糧が不足し、捕虜に配慮できる状況ではなかったことが先行研究により分かりました。

その一方で、第一次世界大戦では、参戦国は 1899 年と 1907 年のハーグ陸戦条約に調印をしました。この条約では、世界で初めて捕虜の扱いに関する国際基準が規定されていました。また、NGO の活動が劇的に増加し、特に赤十字国際委員会は、ジュネーヴを拠点に国際的な捕虜救援活動を展開しました。このような人道的な動きの中で、世界の多くの収容所で文化活動が許されました。このように第一次世界大戦中のヨーロッパの収容所では、不十分な食糧、厳しい規律や重い強制労働がありながら、収容所内の余暇や教育、文化活動が許された矛盾が存在していました。

当時、日本では約 4700 人の捕虜が収容されました。一次資料である赤十字国際委員会編のパラヴィチーニ博士による日本の捕虜収容所視察報告では、全体的に収容所長は捕虜たちの境遇をまずまずのものにしようと努め、規則の中で自由を与えようとしていることを記しています。そのなかで板東では、至る所で音楽が聞こえ、捕虜が冗談めかし「音楽こそが収容所内での最大の問題」と言ったことが記されています。

板東資料の独自性について見るため、ドイツ歴史博物館開催の『戦争捕虜』展（1990 年）を元に、第一次世界大戦時のヨーロッパにおける収容所の資料や、日本の他の収容所の残された資料と板東資料の比較を行いました。その中で明らかとなったことは、第一に、収容所新聞がまとまった形で今でも残っているのが、松山、徳島、板東であることでした。第二に、1970 年頃から、捕虜やその関係者から多くの資料の寄贈を受けたことも特徴の一つとして挙げられました。第三に、資料の内容で見ると、他の収容所と比較して、板東の資料には、板東の自然や地域の人々との交流が表現されることが多いことが挙げられました。特に板東の捕虜であったカーステン・ヘルマン・ズーアのスケッチには、日本の水墨画のような表現で描かれたものもあり、祖国から遠く離れた日本の自然を重んじた文化を学ぼうとした者がドイツ人捕虜の中に存在したことが分かりました。

カーステン・ヘルマン・ズーア画
マリオン・ズーア＝モイリヒ氏画像提供

このことにより、板東資料の独自性の一つに、異文化理解の出発点となったことが挙げられるのではないかと考えました。痛ましい過去を反省しながら、民族や異文化を超えた繋がりの大切さを伝えていければと考えています。この調査において、更なる多角的視点での板東資料の調査の必要性を感じました。（長谷川）

3．「聖堂に描かれた壁画　幻の唐草文様」

ドイツ館が所蔵する唐草文様が描かれた聖堂内部を写した 3 枚の写真が、第二次世界大戦の徳島大空襲で焼失した徳島市徳島本町に所在する「聖パウロ三木カトリック徳島教会」の初期の聖堂内部であることが判明したことについては、『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第 17 号で紹介しました。今回の講座では、聖堂内部に唐草文様が描かれた目的の考察と、東京在住であった県人信者の繋がりを整理しました。

徳島教会の聖堂がホセ・アルバレス神父によって献堂された 1907（明治 40 年）当初は、ステンドグラスはないものの、扉や窓枠、聖マリア像を安置するニッチが尖頭形を呈しており、ゴシック様式風の建築でした。それが 1917（大正 6）年に、当時徳島俘虜収容所に収容されていたドイツ兵捕虜 3 人により、天井から壁面全体を数種類の唐草文様を駆使し聖マリア像を囲い込むように装飾されました。この装飾は 1858（安政 5）年、野薔薇や蔓で覆われたフランス・ルルドのマサビエル洞窟に出現した聖マリアをフレスコ画で再現したものではないかと考えられます。1908（明治 41）年はマサビエル洞窟に聖マリアが出現して 50 周年の年でしたが、その前後に日本でも福山、名古屋、東京、北海道で洞窟模型が建設されます。アルバレス神父は 1911（明治 44）年に完成した東京関口教会の洞窟模型をその翌年に見ており、これに触発され、その後捕虜として徳島に収容されていた塗装・装飾職人やコンクリート製造職人の協力を得て、聖堂自体をマサビエル洞窟に変えることで「ルルドの奇跡」の再現を望んだのかも知れません。

徳島出身の信者の活躍と繋がり

「日本薬学の父」と称される長井長義博士は 1898（明治 31）年にプロテスタントからカトリックに改宗していますが、その頃徳島で布教活動を担当していたパリ外国宣教会のダリドン神父の礼拝に参加しています。徳島教会は 1904（大正 3）年にパリ外国宣教会からドミニコ会の活動に委託されますが、博士はドミニコ会のアルバレス神父とも深く長い付き合いがあり、神父の依頼に応じ 1921（大正 10）年 7 月 25 日に徳島市千秋閣で「現代思潮に対する感想」と題した講演会を開催します。その中で博士は「人間知力では到底解する事が出来ないものがある、人間以外に偉大なる力がある、万有を支配する何物かがあると云ふ事を信じました」と、自らの宗教観も語っています。

人類学者の鳥居龍蔵は 1925（大正 14）年にカトリックの洗礼を受けますが、1892（明治 25）年の上京後からニコライ神学校でロシア語を、カトリック麻布教会でフランス語を教わっています。1911（明治 44）年にはカトリック麻布教会内の借家に居を構え、妻きみ子は子どもと共に先に入信します。1907（明治 40）年生まれの長女の幸子は 1924（大正 13）年にパリに留学し、1926（昭和元）年 6 月から 7 月の間ルルドを巡礼、帰国後の 1931（昭和 6）年に雑誌『声』に紀行文「ルルドの巡礼記」を寄稿しています。幸子自ら描いたマサビエル洞窟やその周辺のスケッチ画も掲載され、当時のルルドの様子が日記調に記録されています。

画家の近藤啓二は徳島教会の壁画制作当時、教会に寄宿しており、製作過程をリアルタイムで見た人物で製作者の氏名を記憶していました。徳島中学校卒、1927（昭和 2）年東京美術学校卒、1930（昭和 5）年にはカトリック美術協会を創立します。現存する作品数は不明ですがアルバレス神父の肖像画や、カトリック築地教会に 5 点（「聖ヨゼフ」、「聖マリアと従者」、風景画、静物画 2）、

東京上大崎の久米美術館に「父の帽子を持つ子」など2点が知られます。また『カトリック大辞典Ⅳ』（1954）に早春の丘にコンタスを手にして立つ老婆の姿を描いた「待望」が掲載されるとともに、「僕の祭壇」、「スイス籾井翁」、「十字架道行図」の作品が紹介されています。近藤らが創立した「カトリック美術協会」は、当時上智大学文学部長であった鳥居龍蔵を顧問に迎え、事務局も同大学に置きました。また、1932（昭和7）年に開催された第1回カトリック協会展に併せた講演会で会員であった鳥居幸子が、「フランス　中世に於ける労働と美術について」と題した講演をおこなっています。

長井と鳥居は東京帝国大学に在籍経験があり、松江豊壽の郷里の先輩である元白虎隊員山川健次郎総長とも親交がありました。また、鳥居の借家があったカトリック麻布教会のツルペン神父とも深い関わりがあったようで、1927（昭和2）年に「ツルペン神父司祭叙階50周年金祝司祭館謹呈」事業に、長井は委員長、鳥居は準備委員長に就いています。

ここに紹介した東京で活躍した4人の徳島県関係者は、教会や大学あるいは創作の場において互いが協力し合いながら、信仰の普及啓発や学問的探求に打ち込んでいたことが分かります。（森）

カトリック美術教会関係者集合写真
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 所蔵

4.「徳島俘虜収容所 －徳島市内にあった捕虜収容所－」

徳島俘虜収容所に捕虜がやって来たのは1914（大正3）年12月17日、そして板東に移る1917（大正6）年4月6日まで捕虜はここに居住していました。その場所は現在の徳島県庁の西側にある駐車場あたりで、当時そこに県会議事堂（公会堂とも称された）がありました。

徳島収容所本館

ちなみに、この建物は昭和初期、県庁が建設されるとき城山の東側に移築され、武徳殿となりました。

所長は後に板東俘虜収容所長となった松江豊壽中佐で、ここでの捕虜に対する人道主義的な処遇のあり方が後に板東でも引継がれます。「徳島俘虜収容所業務報告」に記されている捕虜の取扱い方針によれば、自分たち管理者側の威厳を損わないようにしながらも、捕虜たちのプライドを尊重し、また自由気ままな行動は許容しないが、逆に圧迫苦痛を覚えるような扱いはしないというものでした。その収容所内の雰囲気は、「多くの者にとって何も困ったことはない」と捕虜が書いていることから窺えます。

徳島俘虜収容所で注目されるもう一つは収容所新聞『トクシマ・アンツァイガー』が発行されていたことです。その創刊時期は非常に早く、徳島到着後4ヵ月足らずの1915年4月9日で、これはひょっとすると第一次世界大戦当時の捕虜収容所で作られていた新聞の中で世界一早い発刊かもしれません。もともと週刊発行で3巻構成となっており、最初の2巻が25号ずつ、第3巻が1916年9月17日発行の第17号までです。最後のころは隔週刊となり、そして予告無しに休刊しているのですが、どうも息切れした感が否めません。

この新聞は謄写版を使って印刷されており、最初は黒インクだけですが、しばらくしてカラー印刷もところどころ使われるようになります。ここでの経験が後に板東の収容所印刷所での様々な印刷に反映されていると思われます。

この新聞により、徳島での捕虜の生活や活動の様子がかなり詳しく知ることができます。たとえば、後に板東でベートーヴェンの第九交響曲のアジア初演を行った徳島オーケストラの音楽活動については、その成立の経緯

や創刊号以降に開催された音楽会がすべて記録されていて、徳島市でもこの楽団が活発に活動していたことが分ります。また、戸外活動についても折々に書かれています。たとえば、球技については広い場所をもとめて城山の西の広場や日曜日には近くの中学校の運動場に行ってました。外出・散歩では市内から遠く離れた場所へ行くこともあり、片道 10km 以上ある中津峰山腹の如意輪寺まで遠足したときの様子を描いた記事もあります。このように、当時の捕虜たちの暮しと活動を知る上で貴重な史料となっています。　（川上）

国際交流員イベントを振り返って（令和 4 年度）

5 月 15 日（日）にドイツ館で国際交流員による「イースターイベント」を開催しました。ワークショップとイースターエッグ探しに分かれたイベントで、暖かい日差しを浴びながら参加者はドイツのイースターを体験しました。ワークショップではたまごの彩色など、かわいい季節風の飾り物を作ったり、ドイツ館付近でイースターエッグハントに参加したり、参加者は復活祭での一般的な過ごし方についての解説を聞きながらドイツのイースターに触れました。

またスポーツの日の 10 月 10 日（月）に鳴門市ウチノ海総合公園で「ファウストバル体験」を開催しました。

鳴門市オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ関連事業として 2021 年 1 月 26 日に鳴門市板東小学校でも紹介したスポーツで、今回はスポーツの秋に、ドイツ人捕虜が板東でも楽しんでいた「ファウストバル」を本格的に体験しました。広い公園でファウストバルコート（50m x 20m）一面と練習用コート二面を設置し、どんよりとした空にも関わらず参加者が大会用のボールを使ってドイツスポーツに励みました。

そして去年に引き続き、年の暮れに（12 月 11 日）再びドイツ・クリスマスワークショップが開催されました。参加者は季節に合わせて松ぼっくり人形、クリスマスカードやガラスランタンといったクリスマス飾りを自宅用に作りました。今年も人気で 150 人以上の市民が来場してくれました。日曜日開催ということで、ちょうど第三降臨節にあたり、四つのうち三つのロウソクしか点いていないクリスマスリースを不思議に思う参加者が多く、ドイツのクリスマス習慣に触れるきっかけとなりました。

（シュトライヒ）

ドイツ東洋艦隊に所属した水雷艇「S90 号」の軍艦旗

写真の軍艦旗は、第一次世界大戦当時ドイツ東洋艦隊に所属し膠洲湾の防御任務に従事していた水雷艇「S90 号」の軍艦旗です。白地に黒色で三重線の十字文と、その中心部分に丸紋に黒鷲（Reichsadler）を描き、カントン（Canton）には黒・白・赤の三色旗と鉄十字紋を配置します。黒鷲は王権を象徴する宝物である王冠を被り、右足は王笏、左足は宝珠を握っています。そして胸には黄色で「[偉大なる者] プロイセン国王フリードリヒ」という意味の「FR」の文字を刻みます。これらの特徴か

らこの軍艦旗は、第一次世界大戦期にドイツ帝国海軍が使用していた旗の図柄と一致します。現存する寸法は縦98cm、横95cmで、横の寸法は160cm程度であったと推定できます。

この旗を所有していた大垣利一氏（美馬郡つるぎ町貞光）は、最初に「S90号」を発見した駆逐艦「子日」（初代）に二等機関兵として乗船し日独戦争に従事していました。「S90号」は1914（大正3）年10月18日午前1時すぎに、膠洲湾外で日本の特務艦「高千穂」を魚形水雷で轟沈させた後南方に逃走し、故意に砂浜で座礁し自爆、乗組員は上海方面へと陸地を移動します。10月20日に「S90号」を発見した「子日」は、乗組員12名で捕獲隊を結成し艇内の捜索を行います。利一氏の長女が、捕獲した敵艦のマストによじ登り持ち帰った旗が自身が所有する軍艦旗であると話していたことを記憶していたことから、利一氏は捕獲隊の一員として選ばれ「S90号」に乗り込んだと考えられます。「S90号」の行動と日本海軍の捜索の経緯に関する史料については、インターネット上で公開されています（アジア歴史資料センター 「高千穂沈没竝ニＳ九〇号脱出顛末 第2目 Ｓ九〇号捜索並ニ艦隊ノ警戒」Ref. C14120050800外）。

この軍艦旗は利一氏の孫の大垣大介氏より、「S90号」の母国であるドイツ ザクセン州ドレスデンのドイツ連邦共和国軍軍事博物館に寄贈されることになりました。

（森）

忘れえぬこと『苦境の本』
－グスタフ・メラーが記録した青島戦－

前回のルーエに引続き、板東の捕虜であったグスタフ・メラーの子孫であるペトラ・ボルナー氏より2018年に寄贈いただいたメラーの資料の調査についての報告です。メラーは、板東においてデザインの分野で活躍しましたが、松山俘虜収容所に収容されていた時期に、３冊のノートに記録を書き残しています。

そのノートには、表紙に印刷された"Note"に、独自にウムラウトが入れられ、"Nöte book"『苦境の本』と表記されています。ノートのはじめのページには、「捕虜になり、考える時間を多く手に入れたことから、戦場で経験したことを整理し残してみたいと思う。」とあり、どのように青島の戦いに参戦することになったかを振り返っています。

1914年8月1日、上海でいつものように仕事をしていたところ、武漢の帝国ドイツ総領事館から突然に「徴兵に当たるものは速やかに青島へ出発する準備をし、本日昼の12時に密かにドイツクラブに集合すること」と命令が届きました。内密に上海を出発する予定が、ドイツ人以外、中国人にも既に知れ渡っていたと記されています。同日、ドイツのベルリンでは、皇帝ヴィルヘルム二世が、ベルリンの宮廷前に集まった群衆に、一致団結して戦争に立ち向かうことを呼びかけた時でした。このようにメラーを含む中国に在住したドイツ人は青島に招集されることとなります。

板東から送った家族への手紙が数多く残るヘルマン・ハーケとメラーは同じ第6中隊で、メラーは、ハーケの指示で射撃壕を掘り、陣地の準備をしていました。また、ハーケとメラーは、同じ会社（カルロヴィッツ商会）で働く同僚でもありました。真夏の水も十分にない作業の中、日本の最後通牒が届き、日独戦が始まりました。

メラーの日記には、「気球に乗り、敵の様子を伺った。電話係となったがほとんどの通信は、“敵の気配なし”というものだった。しかし、陸地からの情報でより強い日本の部隊が行進してきていることが知らされた。気球を上げることも危険なので、速やかにしまう命令が下された。」と書かれ、気球での任務が終了し、第6中隊に戻ったとあります。板東俘虜収容所には、気球のような籠に乗って望遠鏡を構えるイラストが描かれたカードが残っています。

この戦争では主に遠方からの艦砲射撃により、青島のドイツの砲台が破壊されていきました。日記の第二部は、戦いが激しさを増し、ドイツが降伏し、捕虜となるまでを書き記しています。その中の記録には、攻撃を受け負傷した同胞の姿を生々しく描写するものもありました。彼は青島戦については、スケッチではなく、主に文章と図面で詳細に記録しています。

11月7日早朝に、日本軍は三堡塁を破壊、イルチス山一帯を占領するに至りました。ドイツ軍は、その日のうちに犠牲を避けるために降伏し、16日に日本軍の入場式が挙行されました。この戦闘での死者は、ドイツ軍は約290名、日本軍は約390名でした。

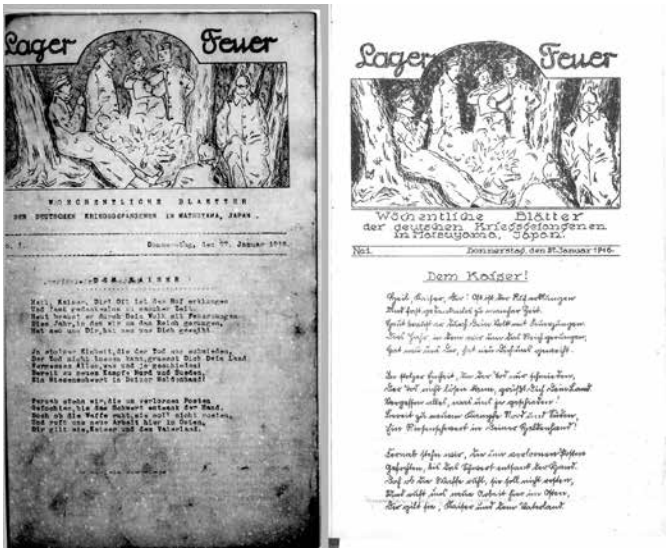
日記の第三部の最後には、「淋しき人々の島」と題された文章が残されています。そこには、「管理される緑の島において、収容所での無為が悪行にならないように、日々勉強し、最後には驚かなくなったことを知った。しかし、笑うことを知ることで、全てのものに意味と価値がついた。それとともに、自然の中で、植物や果物が育つことに喜びを覚え、体を動かし汗を流すこと、そして、芸術家は作品を作り、人々を楽しませることで柵の向こう側を見て、現実を忘れ、自由、切望と愛の夢を見たのだった。こうしてこのように、淋しき人々は緑の島に待っていた。」（一部抜粋）と記されています。実はこれは『ラーガーフォイアー』の第2巻35号に掲載された文章ですが、日記の最後に書かれた散文は、メラーの収容所に対する捉え方ではなかったかと考えられます。（長谷川）

松山俘虜収容所新聞『ラーガーフォイアー』の和訳第1巻完成

板東のドイツ兵捕虜の半数弱は、もともと松山俘虜収容所にいた人たちでした。彼等は松山で収容所新聞『ラーガーフォイアー』を発行していました。これは1916年1月27日に創刊されて以降、板東に移る直前の1917年3月25日まで途絶えることなく週刊新聞として刊行されていました。ただし、1916年2月27日の第5号まで出したところで、収容所長から発禁命令を受けます。しかし彼等は屈することなく、密かに新聞発行を続けたのでした。そんな事情から松山時代には購読希望者に配付することはできず、収容所管理者側に知られないように回覧する形を取らざるを得ませんでした。そこで当初は捕虜の身から解放されたときに、この新聞を改めて印刷し、多くの読者に配る予定であったようです。ところが板東に来て、より大きな自由を得ることができたため、この地で早速印刷・製本に付して販売されたのが復刻版の『ラーガーフォイアー』です。松山ではタイプライターで印字したものを元にコンニャク版で複製していましたが、板東では謄写版を使っています。

鳴門市ドイツ館史料研究会では鳴門市ドイツ館の所蔵する捕虜収容所、特に板東俘虜収容所で印刷された史料の和訳に取組んできました。このほどその作業の一環として、『ラーガーフォイアー』全体の前半に当る第1年次31号までが、和訳第1巻として鳴門市より刊行されます。この内容の一部は、当史料研究会編著『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞「ラーガーフォイアー」』（2019年愛媛新聞社刊）ですでに引用されていますが、あくまで一部にすぎません。また訳文についても改めて見直しをしました。

この刊行を記念して、鳴門市ドイツ館で企画展示「松山俘虜収容所と収容所新聞『ラーガーフォイアー』」を2023年1月13日（金）から3月26日（日）まで行います。松山俘虜収容所については当館であまり詳しく紹介されることがありませんでした。そこで板東に来る前の捕虜たちの生活や活動、その環境などについて写真と図版を使って紹介し、また『ラーガーフォイアー』にはさまざまな学習や音楽、演劇あるいはスポーツに関する記事がありますので、それをパネル展示しています。もちろん、これ以外にも興味を引かれる記事がたくさんあるのですが、今回の展示では触れませんでした。（川上）



『ラーガーフォイアー』創刊第1ページ
左：松山版　右：板東復刻版

『ラーガーフォイアー 松山俘虜収容所新聞』刊行

鳴門市ドイツ館史料研究会訳により松山俘虜収容所で捕虜が発行した新聞『ラーガーフォイアー 松山俘虜収容所新聞 第1巻』が2023年3月より販売予定です。

お問い合わせはドイツ館（088-679-9110）まで。